

目から入った光は、角膜と水晶体(レンズ)を通り、カメラのフィルムに当たる網膜で像を結び、その信号を脳に送ってものが見えるようになります。ダメージがあると視力はとても悪くなります。糖尿病性網膜症、緑内障、網膜色素変性症や強い衝撃で起こる網膜剥離などの病気でもあります。日本では失明者は18万人以上、ロービジョンと呼ばれる視力低下の方も含めると、163万人を超えます。超高齢社会を加速させる加齢性黄斑変性症(AMD)患者も急増しておりQOLの維持には根本的治療法の開発が期待されています。

アカハライモリは、成長した大人でも神経細胞の層である神経網膜を産出すると、1ヶ月半で再生し視力が回復されます。この再生能力は、成長した大人でも神経細胞の層である神経網膜を産出すると、1ヶ月半で再生し視力が回復されます。この再生能力は、成長した大人でも神経細胞の層である神経網膜を産出すると、1ヶ月半で再生し視力が回復されます。この再生能力は、成長した大人でも神経細胞の層である神経網膜を産出すると、1ヶ月半で再生し視力が回復されます。



自然、人、全てが循環し支え合う社会へ

日本両棲類研究所 所長
篠崎 尚史 さん (中宮祠)

両棲類研究所を 設立したきっかけは?

戦後、医師だった父が研究のため、奥日光にサンショウウオの採取に来ていた際、奥日光が無医村だと知り、診療所を建てたのが全ての始まりです。父は医療のかたわら、奥日光の自然保護にも尽力し、尾瀬沼へのダム建設の反対運動や、「日光

篠崎さんの略歴を教えてください

奥日光で診療所を営んでいた父、篠崎尚史の次男として生まれ、小学5年生まで奥日光で過ごしました。その後、都会の学校を出て、6年半アメリカの大学で生物学と核物理学を勉強しました。卒業後は、両棲類研究所を経て、東京歯科大学市川総合病院角膜センターの設立や、日本臓器移植ネットワークの結成、国の臓器移植法の制定などに関わりました。

角 膜移植や献眼普及などに尽力した方にアジア角膜学会から贈られる「アジアアイバンク協会賞」を今年、日本人で初めて受賞した日本両棲類研究所所長で、世界保健機関(WHO)移植アドバイザーなども務める篠崎尚史さんにお話を伺いました。

両生類と医療の関係は?

両生類(両棲類)は人間の40倍ものDNAを持っており、尻尾や手足だけでなく、脳や心臓まで再生する能力を持っています。これを研究することで、人間の再生医療にも応用ができると考えました。

実際にこの研究がきっかけで人間の再生医療のための「体性幹細胞」を人間の角膜から発見し、移植に応用することで、それまでできなかった角膜の損傷の治療などができるようになりました。さらに、ベトナムでは小児まひの治療実験にも成功しました。

両棲類研究所を再開したきっかけは?

再生医療と移植医療を進めていくことは、医療にとって、とても重要なことです。

平成31年に、全ての常勤職を辞めた際に、「故郷の素晴らしい自然を守り、世界中の人に知ってもらいたい」という思いから研究所の再開を決断しました。

これからの活動は?

両生類を研究し、故郷の貴重な自然を保護するとともに、世界に誇れる「日光」を目指してさまざま活動をしていきたいと考えています。

そのための第一歩としても、もっと日光市民の皆さんにも地元日光の自然や歴史の素晴らしさ、成り立ちに目を向けてほしいですね。

♡ インタビューを終えて

臓器移植による人と人との助け合い、二酸化炭素を増やさない環境づくり、地域が潤う経済の仕組みづくりなど、篠崎さんのお話は尽きることがありませんでしたが、全てが「循環」という言葉で共通するものでした。人ごとではなく、誰もが「循環」の輪の中の一人として、命を支え合っていくことが大切だと、考えさせられました。

